奄美出身者の動向と東京における Segregation の形成
——喜界島小野津の例を中心に——

田　島　康　弘

(1989年10月16日　受理)

Migration of Amami People and their Segregation in Tokyo
——in case of Onotsu Village, Kikai Island——

Yasuhiro TAJIMA

第1章　研　究　目　的

日本の近代史は，一面から見れば，地方，農山漁村出身者の都会への出稼ぎ，移住の歴史であった。山村や離島出身者の場合，とりわけこうした現象が著しく，奄美の場合もその例外ではなく，むしろ最も典型的な一例とさえ言えるであろう。早くは明治中期頃から出郷者がいたが，大正・昭和初期そして戦後の高度成長期と，彼等の都会への流れの底にはきわめて強い力が働いていた。彼等の出郷先は，当初は大阪が多かったが，のちには東京の比重が高まってくる。異郷の地に住みついた彼等はやがて，出郷地を同じくする者同士の会，郷友会をつくり，お互いにはげまし合いながら，異郷の地での生活を確立してゆくことになるのである。

移民，移住や都市における居住状況，こうした現象を対象とする学問は，従来地理学や社会学，人口学などの分野から行なわれてきた。地理学においても，外国におけるこうした研究の歴史は古くさかのぼることができる。しかし，日本におけるこのような Migration, Segregation の個別実証的な研究は，それほど多く行なわれてきたとは言えない。というのは，従来日本において，移住者の Segregation の事実そのものがあまり知られていなかったし，こうした現象自体が，とりわけ本土の出郷者においては顕著ではなかったことが，その要因としてあげられよう。しかし，本土の移住者においても，Segregation に関するいくつかの報告例もないことはないのであり，奄美の場合は，とりわけこうした現象が著しいのである。

他方，奄美の研究は一般に，奄美という地域内において行なわれる傾向が強く，奄美の外部での奄美研究の姿勢が弱かったことも指摘できよう。

以上の様な問題意識にたち，本稿では，第二次世界大戦前における奄美出身者の動向および東京における Segregation の形成過程を，喜界島小野津の例を中心に報告する。小野津以外でも，東京

において集住傾向を示すケースもあるようであるが，これらについては別の機会にゆずりたい。

第2章　戦前における喜界島の概況と出郷者の動向

第1節　喜界島における出郷の背景

喜界島は鹿児島県大島郡にあり，奄美大島の東部に位置する面積 55.71 km^2，人口10589人（1985年）の隆起珊瑚礁からなる平坦な島で，最高地点でも海抜 224 m にすぎない。

18世紀の中頃以降，人口は1万人程度で推移してきたが，明治に入ってから人口が増えはじめ，明治中期の1891（明治24）年には15614人，明治末期の1908（明治41）年には19407人，大正初期の1915（大正4）年には20405人と2万人台を越えるまでに至った[1)]。

この頃から出稼ぎが増え出したと言われているので，ここで当時の島の状況を見ておこう。

「大正前期における喜界島の戸数は3000乃至3450戸で，その91％から96％位が農業を営んでいた。一戸当り田が5畝前後，畑5～6段，これで6～7人の家族と家畜が生活して行くのは決して楽ではなかった」[2)] と言われる。また，「今考えると不思議なほど貧困でありました。何処の家でもそれこそ小動物の群れの如くに，大人数の子供がいたものでした。」，「親たちは勤勉で，朝早くから夜おそくまで働きずくめなのに，何処の家でもくらし向きが良くなったという様子はちっとも見えませんでした。」，「島には大島紬と農業がありましたが農業と言っても畑作の砂糖きびとさつま芋が主でしかなく，ほんの猫の額ほどの土地を求めての農耕で，当時の貧しさは現在の喜界の繁栄を思うと想像も出来ないことでしょう」[3)] などと言われる状況であり，当時の楽でなかった生活の様子がうかがわれよう。

また，「当時島の地場産業の黒砂糖も，大島紬も，大した事はありませんでした。当然の帰結として，若者は学校卒業と同時に郷里をあとにして東京，阪神方面へ出稼ぎに出掛け，工員や船員などになって，送金しなければ家計が苦しい時代でありました」[4)] とも言われるように，出郷者が次第に増えてくるのである。すなわち「この生活苦を打開するために，大正なかば頃から阪神方面へ，大正末から昭和初めにかけて東京方面への出稼ぎがふえた」[5)] のである。

第2節　出郷者の動向

喜界島全体の出郷者の動向については次のように言われる。すなわち「阪神方面に進出した出稼ぎ者は，大阪鉄工所その他の工場労働者が多く，また下級船員として，内外航路の客船や貨物船に乗り組んだ者も多数いた。」，「東京方面に進出した者は，主として東京市役所の道路課，土木課などに就職し，大震災（大正12年）後の，東京市の復興事業に従事した。」[6)]

これらの事を念頭に置いた上で，以下に，喜界島北端の一集落，小野津の場合について，詳しく検討することにしたい。

戦前における小野津出身者の一般的動向を，はじめにつかんでおこう。これを知り得るきわめて

適切な資料が，小野津びとの間には残されている。1939（昭和14）年発行の文園彰編「郷土史」である[7]。本書は前半の「字史」の部分と，後半の「卒業生名簿」の部分とからなるもので，筆者は後半の「卒業生名簿」の整理を行うことにより明らかになった事実に基づいて，以下の説明を行なう。

ここで，この「卒業生名簿」の整理の仕方について述べておきたい。というのは，明治中後期は我が国の学校教育制度の創設期であり，この名簿も単純ではないからである。この「卒業生名簿」は明治末に開校した小野津小学校の卒業生名簿と，それ以前のものとの２つに大きく分けられる。それ以前のものとは，東尋常小学校卒業生名簿（２年制で明治29年３月から明治35年３月までの７年間分），早町尋常高等小学校小野津分校場の卒業生名簿（明治37年３月から明治44年３月まで）であるが，この間明治37年から２年間は３年制，39年からの３年間は４年制，42年からは６年制と学制が変ったため，卒業生名簿が重複しており，さらに早町校高等科の卒業生名簿（明治37年３月から大正２年３月までの10年間分）も重なっているため，これらを生年で整理した。

その結果，東尋常小学校卒業生名簿は1887年生から1893年生まで，早町尋常小学校関係の名簿は1894年生から1898年生までに相当し，結局小野津小学校以前のものは，1887年生より1898年生までの者の名簿であることになった。

後半の小野津小学校卒業生名簿も同様に生年に換算すると，第１回（明治44学年度）卒業生は1899年生となり，以下第27回（昭和12学年度）卒業生は1925年生となる。

以上の様な換算を行なった上で，以下の整理は生年で統一して行なうことにした。

この卒業生名簿からわかることは，1938（昭和13）年７月末現在の各年度卒業生の居住地および職業である。1887年生から1925年生までということは，39年間の卒業生を対象とするということになるが，このうちの最後の３年間は卒業後間もないためか，資料が他の部分と質を異にするため[8]，この部分は除いて残りの36年間を整理した。36年間の卒業生総数は1269名であり，このうち1938年時点で死亡者が175名いるため，生存者は1094名である。

はじめに，1938年時点における居住者の整理を行なった。1094名中，居住地不明者の101名を除く残りの993名の居住地が判明している。このうち在郷者が約半数の505名，出郷者が488名である。

そこで，次にこの出郷者の居住地を示す（第2-1表）。関西が約62%で圧倒的に多く，関東の11.5%がこれに次ぎ，両者をあわせると73.2%すなわち全体の約４分の３を占める。又，海外への移住者も少なくない（アジアとアメリカを合わせると14.4%）が，これについては後にふれよう。

次に，年次的な変化をみるために生年別の整理を行なった（第2-1図）。言い変えるとこの図は，1938年時点における各地区居住者の年令別分布を示している。同時に，当時出郷者が郷里を離れる年令は，小学校卒業後（約13才）又は高等小学校卒業後（約15才）と言われているので，この生年に15年程度を加えた年を，彼等の出郷の年と見ることもできよう。

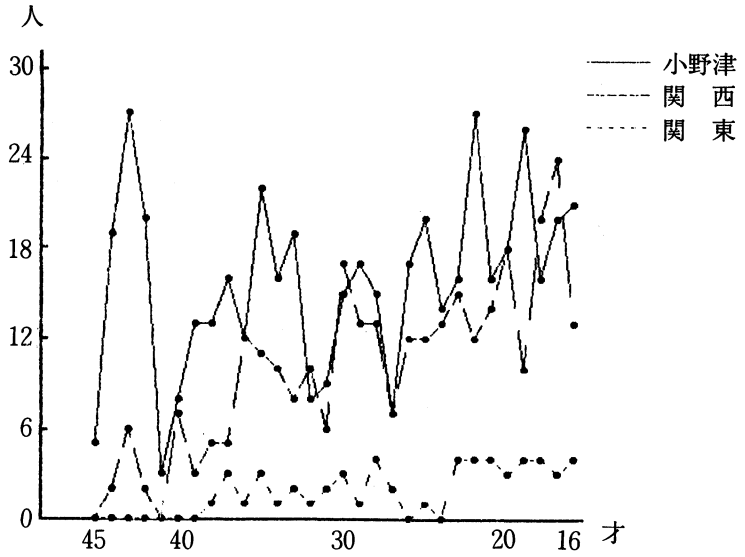
以上の様に見ると，この図から次のことがわかる。

1)　郷里小野津にはどの年令層の者もおり，おおまかに見ればほぼ平均していること。

第2-1表　36年間の総出郷者の居住地（1938年7月末）

	居住者数	割合
関西	301人	61.7%
関東	56	11.5
鹿児島県（除大島郡）	20	4.1
大島郡（除喜界島）	4	0.8
喜界島（除小野津）	15	3.1
その他の国内1)	22	4.5
アジア2)	37	7.6
アメリカ3)	33	6.8
合　計	488	100.0

注1)　この内訳は第2-7表に示す
　2)　この内訳は第2-8表に示す
　3)　アメリカ33人のうち，南米(ブラジル) 2人を含む
資料：文園彰編（1939)：郷土史



第2-1図　各地居住者の年令別分布（絶対数）

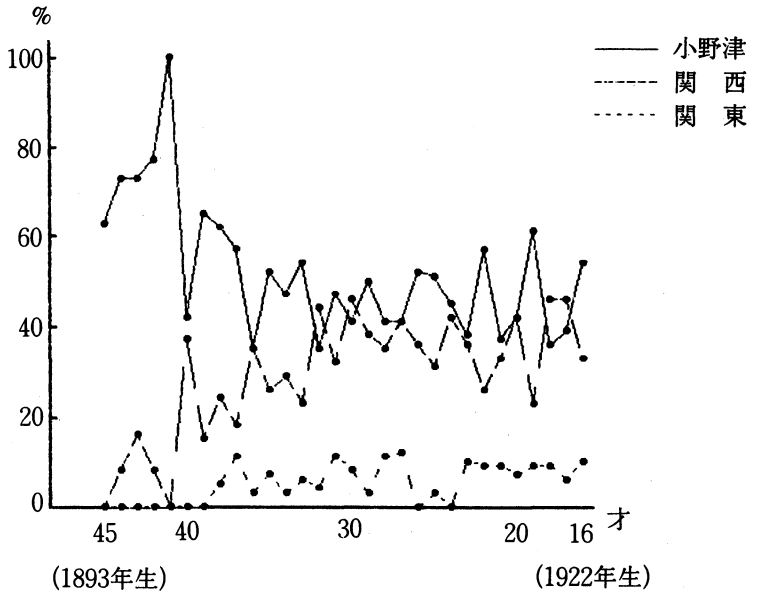
2)　関西は10代が最大（平均約17名）で，やや波はあるものの20代（平均約12～3名），30代（同じく7～8名），40代（同じく2～3名）と年令の増加とともに少なくなっていること。

3)　関東も10代と20代との差がほとんどないことの他は，関西とほぼ同じ傾向であることなどである。

次に第2-1図の絶対数を，各年令（又は生年）毎の総数を100とした場合の各地区別の割合を図にしてみると，次のことがよりはっきりする（第2-2図)。

1)　高年令者ほど郷里小野津に居住する者の割合が高く，とくに1897年以前に生まれた者（41才以上）にこの傾向が強い。又，年令が下っても，郷里居住率は40～50%を保っている。

2)　関西への出郷者が1898（明治31）年生の者あたりから多くなっており，このことは，この年



第 2-2 図　各地居住者の年令別分布（割合）

に15を加えた1913（大正２）年頃から，関西への出郷者が増えはじめたことを意味する（同年令者総数の20～30%）。とくに，1921（大正10）年以降にこの傾向が著しい（約40%）。

3) 関東への出郷者は1901（明治34）年生の者，すなわち1916（大正５）年あたりから多くなり（５%程度），とくに，1922（大正11）年頃からは，さらに高い比率を示すようになる（10%程度）。

次に，関西，関東，その他の国内居住者について，彼等の職業を整理した。まず，関西居住者についてみると，居住者総数301名のうち男211名，女90名で，職業不明者がそれぞれ18名と16名おり，これらを除くと職業の判明している者は男193名，女74名である。彼等の職業を第 2-2 表に示した。

第 2-2 表　関西居住者の職業

男			女		
職業	人数	割合	職業	人数	割合
船員等	92人	47.7%	家事	41人	55.4%
職工・鉄工所	59	30.6	職工	26	35.1
会社	14	7.3	看護婦	5	6.8
商業・店員	13	6.7	商業・店員	2	2.7
公社・公務	6	3.1	計	74	100.0
警官	3	1.6	不明	16	
運転手	3	1.6	総数	90	
その他	3	1.6			
計	193	100.0			
不明	18				
総数	211				

注）男子「会社」の中には一部，鉄工所勤務も含まれているようであるが区別できなかった。
資料：前表と同じ

これによると，次のことがわかる。

1) まず，男子では「船員」ついで「工員」が多く，両者を合わせると全体の8割近くに達し，とくに「船員」の多いことが目立つ。「工員」よりも「船員」が多いことは，先に引用して述べた喜界島全体の傾向とは逆であり，小野津の場合，船員職に就く者が多かったという特色を示すものである。
2) その他では一般会社員　商業とくにその店員，公務員等の順となる。
3) 女子では「家事」が最も多く半数以上を占める。また，「不明」の中味も家事や主婦業の多い事が予想される。
4) 家事以外の，いわゆる「仕事」をしている者は半数以下であり，この中では「職工」が断然多く，その他では「看護婦」，「店員」などである。

そこで次に，92名の船員について会社別の整理を行なった（第2-3表）。この表から言える事は，特定の会社に特に集中しているような傾向は全体的にはあまりないという事であろう。「その他の会社」の21人はすべて別会社であり，会社数だけでも30を数える。しかし，しいて集中度という点からみれば，上位3社で44.0%である事から，ここに集中していると言えなくもない。とくにトップの「山下汽船」は1社で22.6%，4分の1近くを占めていることになる。以上の事は，特定の会社への就職というよりも船員職という方に重点があった事を示すものではなかろうか。

第2-3表　会社別船員数

会社名	所在地	人数	割合
山下汽船	神戸	19人	22.6%
大阪商船	大阪	10	11.9
辰馬汽船	西宮	8	9.5
尼崎汽船	大阪	5	6.0
川崎汽船	神戸	4	4.8
玉井商船	神戸	3	3.6
日本郵船	神戸	3	3.6
日産汽船	神戸	2	2.4
広海商事	大阪	2	2.4
その他の会社		21	25.0
御用船		2	2.4
運用船		2	2.4
通船業		1	1.2
計		84	100.0
不明		8	
総数		92	

資料：前表と同じ

それではなぜ，関西居住者の場合，船員になる者がこのように多かったのだろうか。

この理由は，ひとえに先覚者小野昌雄氏の存在によるものと言えるようである。すなわち，氏は「明治ノ中期当時ノ我ガ国ニ於イテ真に稀ナル海員免状ヲ獲得セラレ其ノ道ニ新分野ヲ拓キテ後進

ニ範ヲ垂レ」[9]，また「一方ニ於テ愛郷ノ念ニ富ミ夙ニ夫妻協力一致シテ凡ユル角度ヨリ後進ノ指導誘掖ニアタ」った方であった。

すなわち，後進の青年達は皆氏を頼って上阪し，船乗りになっていったのである。「船員というのは住・食に心配がなく，衣の方も会社の方でくれた」[10] 事もあるというような事情も，裸一貫の出郷者達にとっては入りやすい仕事であったのかも知れない。

つぎに，関東居住者についてみよう。居住者総数56のうち男45名，女11名であるが，男子の中に職業不明者が3名いるため，職業の判明しているものは男42名，女11名である。彼等の職種を第2-4表に示す。この表から次のことがわかる。

1) 関西と同様に「船員」が多く「職工」もいるが，それ以上に「印刷関連業」が最も多く3割近くを占め，次いで「塗粧業」[11] も2割を越えている。
2) 「印刷関連業」の中では，「鉛版業」の従事者が半数以上を占めている。
3) 女性では，「家事」が圧倒的に多い。

そこで次に，「印刷関連業」および「塗粧業」について，さらに詳しくその実態をみた（第2-5

第2-4表　関東居住者の職業

男

職業	人数	割合
印刷関連業	12人	28.6%
鉛版	7	
印刷	3	
製本	2	
塗粧業	9	21.4
船員	9	21.4
職工	3	7.1
運転手	2	4.8
自動車会社	2	4.8
その他	5	11.9
計	42	100.0
不明	3	
総数	45	

女

職業	人数	割合
家事	9人	81.8%
事務員	2	18.2
計	11	100.0

資料：前表と同じ

第2-5表　印刷関連業及び塗粧業の実態

職業		経営者	所在地	従事者数	備考
印刷関連業	鉛版	山元　正宜	戸崎町13	4人	山元鉛版所
		盛　英信	関口町145	3	正栄堂鉛版所
	印刷	山元　顕久	戸崎町53	2	
		小泉　輝章	柳　町24	1	兄弟
	製本	小泉卯之輔	戸崎町70	2	兄弟
計				12	
塗粧業		岩井　源輔	池　袋7-2010	9	

資料：前表と同じ

表)。これによると，鉛版業の7名は2社に，印刷業の3名も2社，製本業の2名も1社という様に集中性がみられることがわかる。また，塗粧業の9名も1社で同様である。しかも，これらの経営者はすべて小野津出身者であり，印刷業の小泉輝章氏と製本業の小泉卯之輔氏とは兄弟である。さらに，印刷業関係の会社はすべて文京区に集中している事も注目されよう。

また，先の女子11名の働き場所をみると，第2-6表の様になり，小野津出身の経営者のところで働くケースがきわめて高くなっている。すなわち，11名中7名，63.6%，約3分の2近くである。

以上の事を，1938年当時の年令を基準に再現してみると次の様になるだろう。すなわち，山元正宜氏の場合本人（37才）のところで，22才，19才，15才の3人の男子が働き，盛英信氏の場合，本人（28才）のところで，16才の男子2人と19才の女子1人，計3人が働き，また，岩井源輔氏のところでは，本人（37才）のほか，23才が2人，21才，20才，18才，17才，16才，15才各1人合計8人の男子と31才，28才，19才の女子3人総計11人の者が働いていたことになる。この事は，先人の開拓者がおり，その人達を頼って後出の若い者達が異郷の地東京へ進出し，そこを拠点にして，自分達の生活の基礎を築こうとしていた事を示すものであろう。この開拓者に相当する人達が山元正宜氏，盛英信氏，岩井源輔氏などであったのである。

なお，船員の9名について，彼等の船会社を調べたが，3名が国際汽船（丸ノ内）に集中している他はバラバラであり，関西とほぼ同様の傾向であると言えよう。

第2-6表　関東女子の仕事先

仕事の場所	仕事の種類 事務	仕事の種類 家事	計
山元正宜宅（戸崎町13）	1人	2人	3人
盛　英信宅（関口町145）		1	1
岩井源輔宅（池袋7-2010）	1	2	3
その他		4	4
計	2	9	11

資料：前表と同じ

第2-7表　関西・関東以外の国内居住者の職業

職業	地域	九　州	中・四国	北海道	その他	合　計
男	船　員	3人	4人	2人	1人	10人
	軍　隊	3				3
	職　工	1				1
	鉱　山			1		1
	会社員				1	1
	市役所	1				1
	菓子屋		1			1
	大学生	1				1
女	家　事	2	1			3
計		11	6	3	2	22

資料：前表と同じ

次に，関西と関東以外の国内居住者の職業をまとめてみた（第2-7表）。各地区あわせた居住者総数22名のうち，男子19名，女子3名である。職種では，「船員」が19名中の10名で半数以上を占めており，ここでもやはり船乗りが多いことがわかる。また，この10名の中には捕鯨船の乗組員3名を含んでおり，その基地は3名とも下関である。これ以外はすべて，所在地，会社ともバラバラである。「船員」以外では「軍隊」が目立つ程度で，この他特に目立った特色は見られない。

以上，国内移住者の動向を中心に見てきたが，次に海外移住者の動向をみよう[12]。先に第2-1表において，海外居住者はアジア37名，アメリカ33名であることをみた。ここで，その内訳をみると第2-8表の通りである。アジアにおいてやや意外なのは「大連」の居住者が多いことであろう。詳細は不明だが，彼等の職業は職工が比較的多いため，特定の工場か何かに集中していた事も考えられる。また，職業については，不明の6名を除いた31名のアジア居住者の中で，「兵役」が11名と3分の1強を占めて最大であり，その他では「警官」などが目立つ。この職業は，アジア内の地域によって特色があり，「職工」は全員が大連，「農業施設関係者」は全員が朝鮮の居住者である。また，「兵役」は台湾，満蒙，中支に多いが，中でも中支居住者の4名は全員が「兵役」である。なお，アメリカ大陸に多いことについては，別稿で扱う予定であるので，ここでは詳しくはふれない。

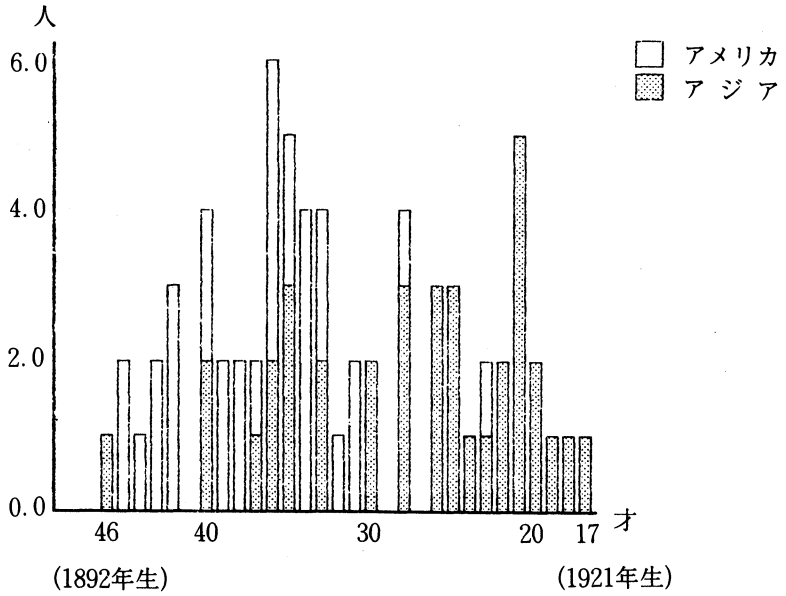
第2-8表　海外移住者の動向（アジア）

職業＼地域		台湾	満蒙	大連	中支	朝鮮	合計
男	兵役	4人	3人	人	4人	人	11人
	警官	2	2				4
	会社		2	1		1	4
	職工			3			3
	農業施設					3	3
	船員	1		1			2
	その他	1					1
女	家事	1	1	1			3
不明		4	1	1			6
合計		13	9	7	4	4	37

資料：前表と同じ

次に，アジアとアメリカとに分けて，彼等の年令をみた（第2-3図）。これによると，アメリカは30代，40代の高年令者が多く，アジアは20代，30代のそれより若い者が多い事から，早い時期にはアメリカへの移住者が多く，次第にその行先をアジアに変えてきたのであろう事が推測される。

以上の出郷状況を要約すると，喜界島では少数の先人が明治中期頃からポツリポツリと出はじめてはいたが[13]，多くの者が出郷するようになるのは大正初期ないし中期頃からであり，大正末から昭和初期にはとくに多かった。また，小野津においても，喜界島全体の傾向と同様に，はじめ阪神方面，のち次第に東京方面への「出稼ぎ」が増えていった。しかし，職業についてみると，阪神方



第2-3図　アジアとアメリカ居住者の年令

面への「出稼ぎ」者は，島全体の傾向と同じく工員や船員が多いが，小野津の場合は船員の多い事がとりわけ顕著であった。また，東京方面では，島全体の傾向である東京市役所の役人などはほとんどおらず，印刷関連業や塗粧業などの自営業が多く，さらに船員も少なくなかったのである。

第3節　「旅の小野津びと会」の結成

はじめは出稼ぎのつもりで出かけた彼等は，時とともに次第に異郷の地に定住するようになる。これらの「出稼者の初期の送金が，郷里の貧しい家を救った功績は大きい。だが，早く金を貯めて故郷に錦を飾ろうという初期の考えとは逆に，彼等はいつしか出稼ぎ地に住みついて，村を離れる者が多くなって来た」[14] と言われるごとくである。

このような状況の中で，大正15年「旅の小野津びと会」結成の動きが生れるのである。ここでは，会結成当時の状況を，文献資料に基づいて要約しておこう。「年輪」[15] に見られる限り，小野津からの最初の大阪への出郷者は小野昌雄氏で，明治22年[16]，氏が15才のときであったという。その後，「小野津人の多数の出郷，先ず大阪九条へ，九条へ，多くは大阪桜島の労働へ，一部は海員へ，アメリカへ，阪神団を成して時々月一回以上会合……一杯やっての気焔を吐く」[17] と言われる状況になっていった。この大阪九条（大阪市西区九条通三丁目五五二番地）は，初代会長小野昌雄氏[18] 宅の所在地である。

会発足時の様子は次の如くである。「大阪在住の早町村小野津の出身者は年々其の数を増加し，今日では二百五六十人の多きに達せるを以て，同地出身の小野昌雄，三島豊二氏等は感ずる處ありて小野津会創立を企て，十一月二十日午後六時より小野昌雄氏宅に於て両氏及玉造署保田部長，十五銀行大井豊二，関西医科大学保田兼吉諸氏外二十名相集り，創立協議会を開いた。協議の結果，小野昌雄氏を会長に推薦し三島文園[19]，保田[20]，大井其の他二十名を幹事に選び，来る正月三日に

大々的発会式を挙げる事に決定した」[21]。又，次に様にも言われている。「旅の小野津びと会は，小野津の大先輩の小野昌雄さんを初代会長に，三島豊二先生，文園彰先生，竹下美好先生の四人の御方が会の生み親となって昭和元年[22]一月に，此花区桜島町の旧性[23]強富則さんの宅で発会式を行い発足致したのであります」[24]。前者の文章を掲載した月刊誌「奄美大島」の発行年月は，昭和２年１月，新年号なので，「十一月二十日」は大正15年，「来る正月三日」は昭和２年という事になる。従って，大正15年末に会発足の準備のための動きがあり，昭和２年１月に，会が正式に発足したという事になるだろう。

次に，発足当時の会の目的や活動状況についてみておこう。当時の会則[25]によれば，会の目的として次の３点を述べている（会則第２条）。

1) 総べての旅の小野津びと同志互いに意志の疎通親睦を図りて互いに磨き合い，
2) 又郷里小野津字の日日の進行と連絡をとりて字の発展を助成し，
3) 尚且つ我等旅の身ながらも氏神様に氏子として至誠奉公の念を実際に致さんとする。

すなわち，親睦，郷里の発展への協力，至誠奉公の３つである。

また，会の事業として，次の３点が掲げられている（会則第10条）

1) 通信連絡の機関として毎月１回会誌を発行し全会員及び小野津字各戸学校並びに保食，八幡両神社へ送達すること。
2) 会員相互の慶弔。右の金額は参円乃至捨円を標準として其の事情の如何に依り会長之を決定す。
3) 保食，八幡両神社の大祭には神前の御供物を献納し並びに小野津字敬老会にはその都度相当の慶祝品を贈呈すること。

すなわち，会誌，慶弔および字敬老会等への物品の贈呈の３つである。

のちの会執行部は，当時の状況を次のようにまとめている。「愛郷心を中心にした，相互扶助，友愛，信義，を基調として親睦と団結を図り，（中略）。年次総会，機関誌“旅の小野津びと会誌”毎月発行（現在の年報旅の小野津びと会報）。親睦と意志の疎通をはかった」[26]と。

なお，会員は「旅の小野津びと全部を以て会員となす」（会則第３条）とあるように，成立当初は各地区に散在する出郷者全員を会員としていた。会が各地区毎に独立してつくられるようになるのは，戦後になってからである。昭和24年に制定された阪神地区の会則[27]では，「本会は旅の小野津びと会と称し阪神在住の小野津びと及びその縁故者を以て会員とす」（会則第１条）と変更されたのである。

しかし，戦前においても活動の中心はやはり大阪で，会の事務所についても，「本会の事務所を大阪に置く」（会則第４条）と規定されており，また，役員の構成をみても，会長と２名の副会長をはじめ，幹事19名中９名が阪神方面で占められていて[28]，会誌発行等の事業に携わったのであった。

第3章　東京における出郷者の増大

第1節　東京開拓者の概況

小野津から東京への初期の出郷者について，筆者は東京在住の山元速雄氏[29]から詳しい話を聞くことができた。本節では，この内容を中心に，前出の「郷土史」，「年輪」などの資料をもあわせて初期の東京への出郷者について整理した。

山元速雄氏が大正15年，小学校を卒業して12才で上京した際[30]，彼を出迎えた約10名ほどの人達を氏は記憶していた。この方々の生年から，筆者はこれらの方々を次の4つのグループに分けることができると考えた。

第1グループは西元禎氏の世代である[31]。氏は明治初期の生れであり，小野津から東京へ出た最初の人で大正はじめの事であった。のちに，彼は独学で弁護士になった人である。

第2グループは，南島純二（1892）[32]，都福常（1892），嵜池三[33]（1893）の諸氏等の世代で，明治25～26年生れである。昭和のはじめ，大阪で「旅の小野津びと会」が誕生したとき，彼等は30代の半ばであり，3人とも東京地区の幹事となっている。なお，第1グループの西元禎氏も同会の東京地区唯一人の雇問であった。南島氏はのち帰郷し，農業及び商業に従事した。都氏は鹿児島師範卒業後東京の小学校教員となりつつ苦学し，高等文官試験に合格して中国地方管区の刑務署長になった人である。嵜氏は大井警察署の署長になったが，東京大空襲で亡くなられたという。

第3グループは，西謙亮（1901），山元正宜（1902），岩井源輔（1904），勇済熊（1904）の諸氏等の世代で，明治34～37年生れである。この世代は，後の東京における小野津人の発展の基礎を築いた世代であると言えよう。というのは，前述のように山元氏は鉛版業のちに印刷業，岩井氏は塗粧業という事業をそれぞれおこし，後の出郷者は彼らを頼って上京し，自分達の発展の基礎を築く寄りどころとなったからである。なお，西氏は日大を出て，叔父で弁護士の元禎氏の書生などをし，勇氏は自動車会社に勤めていた。

第4グループは，武田茂（1909），小泉輝章（1911），野村忠義（1912），山元速雄（1914）の諸氏等の世代で，明治末から大正初期生れである。この世代も，第3グループと協力して，後の基礎固めを行なった世代であると言えるのではなかろうか。小泉氏も印刷関係の仕事[34]であり，山元氏も兄正宜氏と協力して山元鉛版所で働いていたからである。また，小泉氏の弟で5才下の卯之輔氏も，若い頃に製本技術を学び，のち製本業をおこしている[35]。なお，野村氏は古本屋の丁稚をしながら夜間中学を卒業し，日清製粉に入社して鳥栖工場長になっている。なお，武田氏については不詳である。

以上の様な方々が東京開拓者とでもいうべき人々であり，第3，第4グループ，とりわけ第3グループの世代の人々が，その後の発展の基礎を築いたと言えそうである。

第2節　東京在住出郷者の結集

ところで，昭和初期，「旅の小野津びと会」が結成された当時の東京における出郷者の状況は，いかなるものであったのだろうか。

実は，大阪で会が結成されたあと，東京方面でも会員が集って懇親会を行なっていた。「年輪」の中に，次の記録がある。

「(前略) 東京及横浜在住の小野津人はわが『旅の小野津人会』の趣旨を体し昨日午後二時より東京市神田区小川町大常盤料理店に於て第一回懇親会を相催候処出席者実に総会員の過半数の多数に上り実に盛大を極め，日頃の懇親と交誼を倍々深う致候 (後略)」[36]。

この記録は，東京在住の小野津会員，西兼亮氏が，大阪の事務所宛に送った手紙のようである。日付は7月25日とあり，懇親会の開催日は昭和2年7月24日で，8時散会と付記にあることから，かなり長時間だった様子がうかがえる。また，西氏以外の12名（男9名，女3名）の来会者の氏名も付記の中に見られる。

ところで，氏を含めた13名で「総会員の過半数」ということは，当時の東京方面在住の会員数は25名以下であったことになる。東京方面における昭和の初めの出郷者数は，この程度だったのであり関西の250～260名とは比べものにならないほど少なかったと言えよう。

さらに，第2回懇親会がその後開かれている。その記録の一部を引用しておこう。

「(前略) 偖て先に第一回懇親会を催して吾人が目指す理想えの第一歩を踏出した東京小野津人会は一陽来復と共に益々その親善を深うし且つ会の真義に完うせんがため第二回懇親会を去る正月四日午後四時より縁ある神田小川町大常盤桜上に於て開催した (後略)」[37]

この手紙の日付は，昭和3年1月20日で，当日の出席者は7名であった。筆者の西氏は出席者の少なかった事が残念である事を述べられているが，夜の10時半までという，またまた長時間の出会いだったようである。

会結成当時の東京方面在住の会員の様子は以上であるが，このほか，昭和8年か9年頃，岡為輔氏が大阪へ転勤の際，彼の歓送会を同じく大常盤で行ない，十数名が集ったという。会結成の約10年後である昭和13年（1938年）7月の関東在住者は，先に見たように56名なので，この10年間に，東京方面への出郷者は2倍以上（2～3倍）に増えた事になる。この伸び率は，関西方面の伸び率(250～260人から301人へ）と比べると，かなり急であると言えよう。

第3節　先覚者，山本正宜氏の経歴

先に，1938（昭和13）年当時の東京在住者の職業を検討した際，先人の開拓者がおり，その人達を頼って，後出の若い者達がそこを拠点に自分達の生活を築いて行った事を述べた。そして，この先人の職業は「印刷関連業」であり，又「塗粧業」であった事も述べた。

そこで，ここでは，前者の「印刷関連業」に注目し，これをおこした人々の中でも中心人物であった山元正宜氏を取りあげて氏の経歴を追ってみることにしたい。

氏は1902（明治35）年4月12日生れであり，出郷は1918（大正7）年8月，氏が16才の時であった。この間，大正4年3月「小野津の尋常小学校早町高等小学校」[38]を卒業，父の農業の手伝いをしながら，小野津で開かれていた塾で1年程勉強，その後，大島紬工場で2年半働いている。

出郷先は大阪で，2年半船員生活をしているが，これは氏が16才から18才の間のことである。出郷理由について氏は「商業をなんとなく賤しい職業とする」当時の鹿児島県の中にあった意識を氏も持っていた事をあげている。又，氏にこのような行動をおこさせた当時の時代的背景について，「苛斂誅求が激しかった後遺症のようなものが貧困からの脱出という形で，島民は，特に，次男，三男はこぞって他国に出て行った時代のようでした。そしてまた，青年立志の時代と言うか，大型の時代と言うか，私たちには他国に出かけさえすれば，すぐにでも希望が遂げられるような錯覚を起こさせる雰囲気が充満した時代でした。」と言いまた，「この第一次欧州大戦の日本歴史に残るあの好景気は，それこそ，一夜にして数万の金を儲けると言った成金が生まれ，いわゆる成金なる新語を流行らせた程でしたから，何か世の中全体がうわついた時代でした」とも述べている。

こうした背景の中で，船乗りになった直接的きっかけは，多くの他の郷里出郷者と同様に「小野（昌雄）氏のお世話によるものだった」[39]。「佐川丸と言う貨物船の船員見習」になり，「世界各地を廻る寄港地の多い外洋航路ですから，変化のある生活を体験した」と言う。

1921（大正10）年3月，氏は船を下りる。そのときの心胸を，氏は次の様に述べる。「下船にふみ切ったについては，考えに考えた末だったのですが，その頃，東京の小学校教諭をしていた文園彰氏に刺激された気がします。船員資格試験の勉強で何うしても基礎的な学力不足を痛感していたし，何れの職業でもまず学問をしないとどうしようもないと感じていた（後略）」と。

以上の16才から19才直前までの，船乗り時代の約3年間をふり返って，氏は自分の人生の高等学校時代と呼んでいる。

同年4月，上京「それから五年ばかり，本当に苦労の連続」だったようで，「昼間は働き，夜は学校の生活が続いた」。このような生活の中で「電話の地下ケーブルの穴堀りをやっていましたが，両立させるためには屋内での仕事の方が疲れないのではないかと，鉛版屋に住み込んだのが，私の一生の職業になってしまったのであります」と氏は述べている。氏が，鉛版，印刷という仕事に入ってゆくきっかけは，この様なものであった。最初住み込んだ所が「蛭沼鉛版所」で，その後も，幾つかの会社を転々としたというが，「色々仕事を変え，勤め場所を変えたのも，人生を知ると言いますか，多くの人を知ることによって，自分の視野を広めたいと言った考えで，必ずしも仕事の楽不楽や収入の多寡だけでは」なかった。以上の，上京以降26才で独立するまでの間を，氏は自分の「人生大学の修業」の時代だったとかえりみている。

1928（昭和3）年4月，「たまたま，知り合いに廃業する鉛版工場があり，買って[40]自営してみないかと誘われ」，「小さな鉛版工場をはじめた」のが山元鉛版所の創業であった。「場所は共同印刷の近く，ちょうど，共同印刷の下請印刷工場がまるで巣のように群っていた小石川区戸崎町三十七番地」である。

氏が独立するや，郷里の若い者が氏を頼って上京するようになる。「私は大てい五時に起きて，朝の七時頃までは，まず従業員一人の半日分位はしたものです。夜も仕事をやめるのが十時過ぎでした。そのうちに田舎の喜界島から，弟の山元速雄（現三元社々長），盛英信君（故人，慶昌堂印刷社長），安田茂助君（故人，安田鉛版印刷社長），園田正君（現園田鉛版印刷社長）等，たくさんの優秀な若い人たちが上京して，住み込み工員として，働いてくれました。」とある通りで，彼らも（　）内に記述されている様に，のち，これらの鉛版，印刷分野で独立して仕事をする様になるのである。

「こうして街工場山元鉛版所は順調に成長して」[41] 行き，「次第にお得意も増え，従業員も増えて」，「昭和十一，二年頃になると，従業員も一六，七人を数え，工場もせまくなったので，その前年の昭和十年夏に，戸崎町一三番地に寮兼工場を新築，また戸崎町五〇番地に第二工場を設置し」[42]「零細工場の多い鉛版業でしたが，この時，東京でも一番大きな工場になって」いたのである。

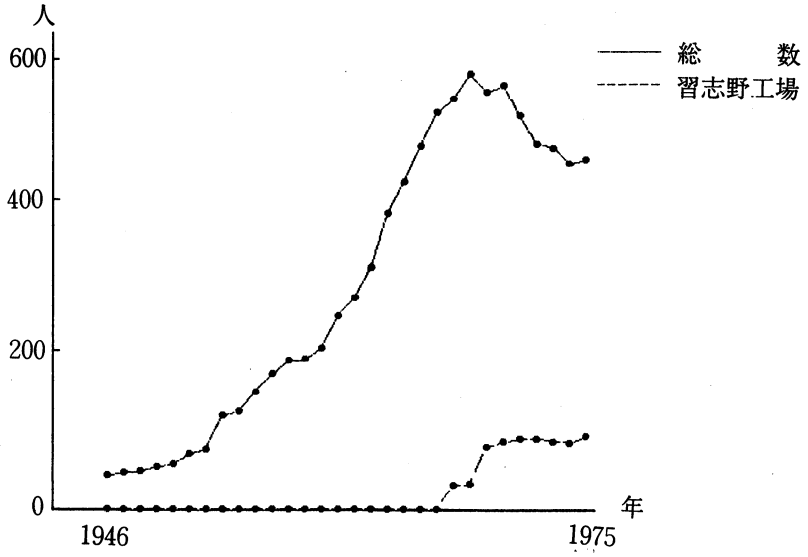
1941（昭和16）年11月，「鉛版専業から印刷企業への進出」が行なわれる。「鉛版の仕事を通して，印刷のこと，印刷業界のことを知り尽していた彼にとって新しい飛躍をなお求めようとするならば，鉛版からの脱皮，というより鉛版を含めた印刷を手がけることに思い至るのは至極，当然のこと」[43] だった。「ちょうどその頃，山元鉛版所のお得意だった柳文堂印刷所が，折から推進されていた印刷業新体制によって小石川印刷㈱に統合されてしまったので，彼は思いきって不要になった工場の権利を買うことにした」[44]「小石川区柳町29番地，借地でほんとに小さな工場でした。B 全の活版印刷機二台，その後，菊半截一台を追加しましたが，これが現在の印刷会社に発展する端緒になった」のである。当時の社名は「三晃社印刷所」であった。

やがて，戦災，工場疎開，敗戦，工場再建と，混乱とめまぐるしい変化の時期を迎えるが，敗戦当時43才であった彼はいち速く工場の再建にとりかかり，十月半ばには機械の据え付けを終って動かせるようになっていた。当時は「戦争の反動として，言論の自由化が出版の自由化を生み，文化国家建設への掛け声と共に，[45] やって来る，あの印刷の大興隆期」の夜明けであった。「印刷業界全体としてはまだ復興ならず，機を逸せず再建した三晃印刷所に仕事が殺到してきたのは当然」であった。年末には活版整版設備を買収し，「整版，鉛版，印刷部門をそなえた活版印刷総合工場としての体裁をととのえ」「翌二十一年六月二十一日，三晃印刷株式会社と名称を変更」，その後も「当時他の印刷所では資金，仕事量の心配から，高性能な機械を導入することの少なかった二回転の印刷機を思い切って二台発注」するなど，思い切った拡張政策を行なったおかげで，「戦後の急激な出版ブームにも応えることができ，お得意も倍増して業界の信用も一段と高まった」[46] のである。かくして，「きれいで納期厳守の印刷所と言うことで，中央公論社，講談社，光文社，筑摩書房など，大手出版社からご愛顧いただくようになって」きた。「思うに，現在の三晃印刷の基盤はこの二，三年で固まったと言って良いかと思います。」と氏は述べている。

その後の会社の発展については簡単に述べよう。1956（昭和31）年，新宿区水道町に石切橋工場

を建設，その後も数回の増改築工事が行なわれ，1975（昭和50）年現在で，総計7268平方米の社屋工場が建設された。また，「大型貨物自動車の規制，工場公害の問題などがあって，都心であるわが社，石切橋工場は，もはや限界に来つつあ」ったため，1967（昭和42）年に，千葉県習志野台に，習志野工場を新設している。敷地が3600坪，別に1600坪の社宅用地が確保されている。

なお，戦後の従業員数の変遷について，第3-1図に示しておく。戦後築かれた土台の上に発展して行く会社の姿が，読みとれるであろう。現在，当社は印刷業界の中で，「大日本，凸版，共同の3大会社に次ぐ中堅5～6社の中の1つ」[47]にまで成長している。



第3-1図　三晃印刷従業員数の変遷

第4章　戦後における Segregation の形成

第1節　東京小野津会の結成

昭和初期，東京在住の小野津出身者は20名前後であり，昭和13年の記録によれば56名であった事を先に述べたが，この当時は，大阪に事務所をもつ「旅の小野津びと会」の一部であった。大阪では1948（昭和23）年1月，戦後初の総会が開かれたのであるが，これより早く1947（昭和22）年4月の第1日曜日に，東京では，「戦後の混乱期にあって，お互いの心の支えが必要」[48]であるとの事から，山本正宜氏，岩井源輔氏らが中心となって第1回敬老会が大塚の茗渓会館で行なわれ[49]，「東京小野津会」が結成されている。以後「年に1回，総会を兼ねて郷里のお年寄をおなぐさめ申し上げる意味から，敬老会を開催して」きている。会長の職は正式にはなかったと言うが，実質的には山元正宜氏が，二十数年間その努めをされて来た様である。

なお，氏は会の意義について次の様に述べられているので，ここで引用しておこう。「人の連がりが私どもの人生にどれ程大切であるか，とりわけ，同じ郷里の人々が異郷で結ぶ連がりは家にも

似て大切であろうと思います。こうして，故郷と離れ，東京で生活している者同志が一同に会し，ふる里を思い，近況を伝え，将来を語り合うことはこの上ないよろこびであり，お互いの今後に大いに役立ち，引いては社会の向上に大きく貢献していくものであると考えております」と。

また，山元速雄氏，三島彰氏，上野篤義氏等も中心的な世話役となって会の発展を支え，現在に至っているのである。

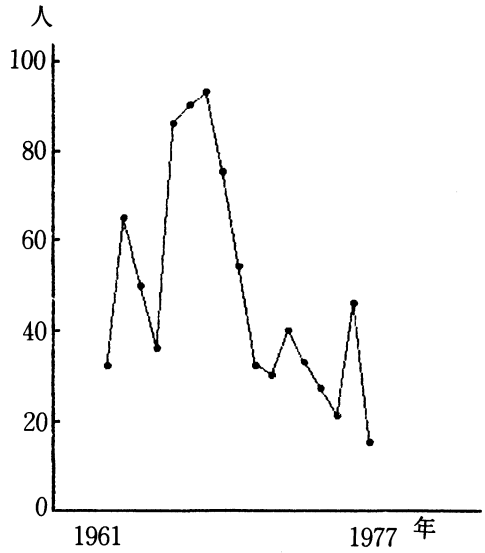
第2節　職業面における東京と郷里との結合

本節では，職業面における東京と郷里との結合の一事例として，三晃印刷における新規学卒者の採用状況について検討することにしたい。

一般に，小・零細企業の場合「かずかずの縁故を辿って働き手を連れて来る，といったやりかたが一般的」[50] であり，三晃印刷でも「当初は主に縁故によって人を雇っていた。だが，事業が大きくなって，より多くの人手を必要としてくると，いつまでも旧来のやりかたを守っているわけにはいかない。つてで入って来る人は，一般的にいって，身許も確かだし，その人間も比較的よくわかっているので，安心して使っておられるという良い点もあるが，反面，より優秀な，よりその仕事に適した人を必要に応じ，まとめて雇い入れようとしても，とてもできるものではなく，ここに縁故採用の限界がある」というわけだ。

かくして，1951（昭和26）年までは縁故採用のみであったが1952（昭和27）年4月，新聞紙上に広告を載せ，はじめて公募—試験—採用といった雇用方法に踏み切った。しかし，しばらくは，毎年若干名の採用にすぎず，「かなり多数の新規学校卒業生がまとまって入社したのは36年3月から」である。

そこで，次に1961（昭和36）年から1977（昭和52）年までの新規採用者数の変遷を示す（第4-1



第4-1図　新規採用者数の変遷

図)。採用者数のピークは1967年で，1968年頃からは人手不足，就中，若手労働者の不足の時代となり，同時に一旦就職した者の定着率も下ってくる。1972年の増加は，「求人対策本部」を設け，従来の求人方法である「広く，浅く，回数はできるだけ多く，学校その他に働きかける」といったやり方を，「狭く，深く」に切り変えた結果であるようだ。また，1976年の増加は習志野工場の拡充に伴うものである。

また，男女別でみると，従来は男子が中心であったが，1962年整版の仕事を女子に代替する方針が決められて以降，毎年相当数の女子を雇用することになった。ちなみに1961年は32名中女子は3名（9.4%）にすぎなかったが，62年に24名（36.9%），65年には31名（36.0%），72年に20名(21.5%)，73年に30名（40.0%），77年には9名（22.5%）というように女子の比率が増加した。

学歴では高卒者がほとんどであるが，一時期，中卒者も一部採用している。他方，1965年からは「技術の向上，工場の科学的管理等を図るために，新規の大学卒業者の採用」も行なわれるようになり，その後毎年，若干名を採用して来ている。

以上，三晃印刷における新規学卒者の採用状況の概要をみてきたが，次に，問題の出身地別の検討を行おう。高卒男子採用者総数に占める鹿児島県出身者の割合の推移を第4-1表に示した。これによると，1966～67年頃までは鹿児島県出身者の比率はきわめて高く，'62年を除いて[51]都道府県別採用者数で1位を占めていたが，1968年には急に採用者数0となってしまい，その後も回復の様子もなく，1976年においても35名中1名の鹿児島県出身者の採用があったにすぎない。すなわち，1966～67年を転機に，求人地図が大きく変ったと言えるのである。

以上の点をもう少し具体的にみるために，1961年，66年，76年の3時点における，高卒男子の出身県別採用者数をあげてみると，1961年における総数29名の内訳は，鹿児島17の他東京4，山梨4，新潟2，宮城1，愛媛1であるが，1966年では，総数が72名で，鹿児島30，宮城8，東京7，新潟7，愛媛6，佐賀4，山梨，神奈川，島根が各2，埼玉，栃木，茨城，福島が各1となっており，鹿児島が依然高い比率を占めている事に変りはないが，出身県数が多くなり，採用地域が広がって

第4-1表　高卒男子採用者総数に占める鹿児島県出身者の割合の推移

年　次	総　数(全国)	鹿児島県出身者数	割　合	鹿児島県の順位	第2位(第1位)県の採用者数
1961 (S. 36)年	29人	17人	58.6%	1位	4人
1962 (S. 37)	41	13	31.7	2	17（第1位）
1963 (S. 38)				1	
1964 (S. 39)				1	
1965 (S. 40)					
1966 (S. 41)	72	30	41.7	1	8
1967 (S. 42)	73	19	26.0	1	16
1968 (S. 43)	39	0	0.0		
⋮					
1976 (S. 51)	35	1	2.9	10	5（第1位）

注）空白の部分は不明
資料：「五十年の歩み」

いる事がわかる。さらに，1976年の場合をみると，総数35名の内訳は，千葉５，埼玉４，山形４，青森４，福岡４，茨城３，新潟３，高知３，愛媛２，宮城，熊本，鹿児島が各１となり，鹿児島の激減と，採用地域の広がり中でどちらかと言うと関東（12名），東北（９名）が多くなっている事が目立つ[52]ように思う。

以上みたように，はじめは縁故採用がおおく，公募以後もしばらくは社長山元正宜氏の出身県である鹿児島県からの採用者が多かった[53]が，求人難時代を経た後は採用地域が拡散したと言えよう。

第３節　Segregation[54]の形成と拡大

本節では，戦前の1938年，戦後の1975年および1989年現在の３時点をとり，小野津出郷者の居住分布について検討したい。

まず，上記３時点における都県別の居住者数の変化をみよう（第4-2表）。この表から，1938年時点では，もっぱら東京都それも23区内に集中していたが，戦後その比率が低下し，1975年に68.4%，89年では55.0%となっていること，そしてこれとは逆に埼玉県の比率が，21.5%，35.8%と増大していることがわかる。神奈川県では絶対数は増えているが，比率においてはほとんど変化がみられない。

第4-2表　小野津出郷者の都県別居住者数の変化

都県＼年	1938	1975	1989
東京都	49人（**92.5%**）	156人（**68.4%**）	180人（**55.0%**）
23区	48（90.6）	145（63.6）	162（49.5）
都下	1（1.9）	11（4.8）	18（5.5）
神奈川県	4（7.5）	16（7.0）	23（7.0）
埼玉県		49（**21.5**）	117（**35.8**）
千葉県		6（2.6）	5（1.5）
栃木県		1（0.4）	2（0.6）
合計	53（100.0） （不明３）	228（100.0）	327（100.0）

資料：「郷土史」，「年輪」，「東京小野津会会員名簿」による。

そこで次に，東京都における区別居住者分布をみた（第4-3表）。まず，1938年では，文京，豊島，千代田といった都心およびその北部に集中していた。文京区は，山元氏をはじめとした鉛版，印刷関係の人達の居住地であり，豊島区は岩井氏を中心とした塗粧業の人達の居住地であった。なお，千代田区の７人中の６人と，中央区の２人は，すべて船員であり，これらの住所は船会社の所在地であって，実際にそこに住んでいたわけではないようだ。従って，もっぱら上記２カ所に集住していたと言えよう。1975年になると，文京区は33.3%から24.1%へ，豊島区も22.9%から7.6%へと低下し，逆に板橋（2.1%から22.1%へ），新宿（4.2%から9.0%へ），北（０から8.3%へ），練馬（０から6.2%へ）などの各区の居住者率が高くなってくる。さらに，1989年には，以上の傾

第4-3表　東京都における居住者分布の推移

区＼年	1938	1975	1989
文　京	16人（33.3%）	35人（24.1%）	26人（16.0%）
豊　島	11（22.9）	11（7.6）	5（3.1）
千代田	7（14.6）	6（4.1）	
目　黒	4（8.3）	2（1.4）	1（0.6）
中　央	2（4.2）		
新　宿	2（4.2）	13（9.0）	6（3.7）
大　田	2（4.2）	7（4.8）	5（3.1）
板　橋	1（2.1）	32（22.1）	76（46.9）
江　東	1（2.1）		2（1.2）
荒　川	1（2.1）	3（2.1）	2（1.2）
世田谷	1（2.1）		1（0.6）
北		12（8.3）	13（8.0）
練　馬		9（6.2）	12（7.4）
品　川		4（2.8）	1（0.6）
足　立		4（2.8）	3（1.9）
江戸川		2（1.4）	3（1.9）
中　野		2（1.4）	2（1.2）
杉　並		1（0.7）	3（1.9）
港		1（0.7）	
渋　谷		1（0.7）	
葛　飾			1（0.6）
	48（100.0）	145（100.0）	162（100.0）

資料：前表と同じ

向が新宿を除いて，いっそう強められ，とくに板橋区の居住者率が23区全体の46.9%ときわめて高くなる。なお，都下では，1975年の2名以上居住地区は清瀬市3（27.3%），立川市2（18.2%）のみであったが，1989年には東久留米市6（33.3%），清瀬市2（11.1%），小金井市2（同）となって，東久留米市への集中がやや目立つ。

次に，居住者の増加した埼玉県における市町別の居住分布をみよう（第4-4表）。1938年は0なので，まず1975年からみると，戸田市への集中が53.1%ときわ立っている。次いで上福岡市，志木市，和光市，川越市と続いていた[55]。これが1989年になると，戸田市は依然として集中地区に変りはないが，県全体の中での相対的比重は31.6%へと低下し，富士見町，朝霞市，川越市，浦和市などの比重が高くなってくる。筆者はこれらの居住者数の分布図を作ってみたが，それによると，居住者数の増加地区は，1）富士見町，朝霞市，川越市，上福岡市などの東武東上線沿線，2）浦和市，川口市，大宮市などの高崎線沿線，3）所沢市，入間市などの西武線沿線などであると言えるように思う。前述した東京都東久留米市への集中なども，以上の3）の現象の一部と考えられよう。

以上みたごとく，東京方面在住の小野津出身者には集住の傾向がみられ，初期には文京区，豊島区が中心であったが，次第に板橋区，北区，練馬区，埼玉県戸田市方面へと北方へ移動し，さらに，東武東上線をはじめとした鉄道沿線に沿って集住しつつ，その居住地を拡大してきたと言えよう。

このような集住の背景は「職業」の要素があったことは既に見た通りであるが，最後に，1989年

第 4-4 表　埼玉県における居住者分布の推移

市・町＼年	1975	1989
戸　田	26人(53.1%)	37人(31.6%)
上福岡	6 (12.2)	5 (4.3)
志　木	3 (6.1)	2 (1.7)
和　光	2 (4.1)	1 (0.9)
川　越	2 (4.1)	7 (6.0)
富士見	1 (2.0)	11 (9.4)
朝　霞	1 (2.0)	10 (8.5)
浦　和	1 (2.0)	6 (5.1)
草　加	1 (2.0)	4 (3.4)
新　座	1 (2.0)	3 (2.6)
三　芳	1 (2.0)	2 (1.7)
大　井	1 (2.0)	1 (0.9)
杉　戸	1 (2.0)	1 (0.9)
与　野	1 (2.0)	
狭　山	1 (2.0)	
川　口		5 (4.3)
大　宮		5 (4.3)
所　沢		4 (3.4)
入　間		4 (3.4)
蕨		1 (0.9)
越　谷		1 (0.9)
上　尾		1 (0.9)
鴻　巣		1 (0.9)
白　岡		1 (0.9)
久　喜		1 (0.9)
鶴ケ島		1 (0.9)
坂　戸		1 (0.9)
毛呂山		1 (0.9)
	49 (100.0)	117 (100.0)

注)　1938年は 0 である。
資料：前表と同じ

現在における印刷関連業者および塗粧業者の状況をみておきたい（第 4-5 表)。これをみても，印刷関連業者が，板橋（19人)，文京（9 人)，戸田（7 人）などに集中しており，前述の Segregation の核となっている様子がうかがえよう。また，これ以外の自営業として，運送業（4 人)，理髪業（3 人)，その他[56]（5 人）などがあり，これらの内部でも多少の職業関連が見られるようである。

以上の印刷関連を中心とした自営業者が中心となって「東京小野津会」も運営されているのであって，このことは，会の役員30名中21名（7 割）が自営業者であることをみてもわかる（第 4-6 表)。中でも，「印刷」と「製本」が 6 人づつと中心をなしており，地域的には「戸田」と「板橋」が中心であることがわかるであろう。とくに，戸田には「郷里で育った若い者が多」く，「戸田小野津会」という東京小野津会の支部ができていて，毎月 1 回集って野球やブラスバンドの活動を行なっていると言う[57]。

第4-5表　印刷関連業者等の居住地（1989年）　（単位人）

	総数	印刷	製本	鉛版	研磨	塗粧	印刷＋塗粧	合計
東京都	179	26	8	2	5	5	41＋5	46
板橋	76	14	4		1	2	19＋2	21
文京	26	7	2				9＋0	9
北	13	2	1	1			4＋0	4
練馬	12					2	0＋2	2
新宿	6	1		1			2＋0	2
大田・品川	6				1		1＋0	1
豊島	5					1	0＋1	1
その他の23区	18				1		1＋0	1
都下	17	2	1		2		5＋0	5
埼玉県	118	3	4			4	7＋4	11
戸田	37	3	4			2	7＋2	9
その他の埼玉	81					2	0＋2	2
神奈川県	23				1		1＋0	1
千葉県	5							
栃木県	2							
	327 (100.0%)	29	12	2	6	9	49＋9 (15.0%) (2.8%)	58 (17.8%)

資料：東京小野津会相談役，正岡五十一氏からの聞き取りによる。

第4-6表　東京小野津会役員諸氏の職業と居住地　（単位人）

市・区＼職業	印刷	製本	研磨	鉛版	塗粧	運送	商事	自動車	非自営	計
戸田	1	4			1				1	7
板橋	4	1				1				6
大田			1			1			1	3
新宿				1					1	2
東久留米		1	1							2
横浜									2	2
文京									1	1
北	1									1
杉並							1			1
和光									1	1
上福岡									1	1
川越					1					1
浦和									1	1
大和								1		1
	6	6	2	1	2	2	1	1	9	30

資料：東京小野津会会員名簿（1989.3）および正岡五十一氏からのききとりによる。

第5章　ま　と　め

以上，19世紀末から20世紀前半までの郷里小野津から大阪への出郷，東京の相対適比重の高まり東京における Segregation の形成，その背景にあった職業の類似性，先覚者的中心人物の存在など

を検討してきた。また，20世紀後半（戦後）における Segregation の変化・拡大とその核となる同郷，同職集団についてもみてきた。以上の中の主要な点を，最後に要約しておきたい。

1) 戦前，とくに1920年代（大正末期から昭和初期），母村の貧困さの中で多くの者が，小学校又は高等小学校卒業後，出郷した。
2) 彼等の行先は，はじめはほとんどが大阪で，とくに小野津では，故郷の先輩小野昌雄氏を頼って上阪し，船乗りになる者が多かった。
3) その後，東京方面への出郷者の比重が相対的に高まっていったが，彼等の中で印刷関連業や塗粧業などの自営業で成功する者が生まれ，その人達を頼って上京する者も多くなった。
4) これらの成功者は，その後の発展の基礎を作った人々であり，筆者が区分した出郷者グループの中では第3，第4グループ，とくに第3グループに属する人々であった。
5) 以上の結果，印刷関連業者たちの根拠地，文京区と，塗粧業者の根拠地豊島区とに小野津出身者が集中するという状況が生まれた。
6) 戦後は，これら同郷・同職集団の地域的発展・拡大が行なわれ，戦前の文京・豊島地区から，板橋地区，戸田地区へと彼等の集住の中心が移動・拡大した。
7) この動きはさらに，東武東上線沿線などの鉄道沿線に沿って北方，北西方に集住，拡大している。
8) 彼等同郷集団の結びつきの中味について考えてみると，
   ① 出生・生育が同じ場所，同じ環境の中であったという共通生活の基盤を持っており，他とはっきり区別し得る客観的基礎をもっていること。
   ② 上のことは言葉や文化の共通性を持つことを意味すること。
   ③ 小学校や高等小学校も同じなので，彼等の集りは同総会的性格もあわせ持っているということ。
   ④ 同一集落なので，地縁的な人のつながりのみならず，祖先から子孫にまでわたる血縁的なつながりもあり，姻戚関係同士の者も少なくないこと。

などをあげることができよう。こうした要素を持つ彼等が，異郷の地において互いに寄り合い助け合い，はげまし合うのは当然であり，郷友会活動の基盤もこうした要素の中に見られると言えよう[58)]。

注

1) 以上の人口数は，竹内譲（1969）：喜界島の民俗，黒潮文化会，13 p. による。
2) 竹内譲（1933）：趣味の喜界島史，黒潮文化会，356 p. また，前掲，「喜界島の民俗」にも，ほぼ同様の記述がある。
3) 山元正宜（1975）：私の五十年。旅の小野津びと会：「年輪」，190～192 p.
4) 忠岡義一郎（1975）：平々凡々五十年　私の年輪。旅の小野津びと会：「年輪」，156 p.
5) 前掲注2)，356 p.
6) 前掲注2)，357 p.

7) 本書は小野津の歴史を知る上できわめて貴重な書物である。筆者は本書の復刻版（昭和55年8月）を1989年4月に，東京在住の正岡五十一氏の御好意により寄贈を受けた。
8) 小学校卒業生であるため，職業は男子は高等科，女子は家事が圧倒的に多く，また，居住地も在郷がほとんどである。
9) 後掲注15)，郷土有志一同：小野昌雄氏御夫妻胸像贈呈ニ当リテ，53 p. なお，この胸像は，現在小野津に立てられ，この文章が刻まれている。
10) 後出，山元速雄氏の話である。
11) 双眼鏡や写真機に対するふきつけの仕事であるという。
12) なお，ここでは当時の台湾，朝鮮，中国等のアジアも海外として扱う。
13) 例えば，「小野おじさん」として親われていた，「旅の小野津びと会」初代会長の小野昌雄氏の大阪への出郷は，明治22年である。
14) 前掲注1)，11～12 p.
15) 本書は「旅の小野津びと会五十周年史」であり，会発足当時発行された「会誌」からの抜萃，海外を含む各地居住者からの便り，会員諸氏の歩み，想い出など，会についての研究面でもきわめて貴重な資料集である，巻末には各地区居住者の住所録も載せている。旅の小野津びと会編集，昭和50年8月20日発行，非売品。
16) 田畑幸之信：初代会長小野昌雄氏御夫妻を偲ぶ。「年輪」，55 p.
17) 文園彰：心に風が吹く。「年輪」，31 p.
18) 氏の経歴や人柄については，次の文章がよくそれを示している。「氏は明治七年小野賀昌氏の三男として誕生，（中略）明治二十二年大志を抱かれ上阪，先ず船員として働きながら苦学，大正八年，2種一等航海士の免許を獲得のち，大阪市九条通三ノ五五二に住居を構え，商業を営みながら郷里と連絡をとり合って上阪してくる若者達の面倒，特に就職の斡旋等の外，身の上相談とあらゆる面で親替わりとなって世話をする。郷土の人びとからは勿論のこと全島の若者達が，九条へ九条へと小野大先輩を訪ねて来阪，その人かず知ず――九条のおじさん，おばさんの愛称で多勢の方に親しまれ信頼され，郷土の大恩人として敬慕する事，実に大山を仰ぐ様であった。」前掲注16)と同じ。
19) 「三島文園」とあるが「三島，文園」の誤りであろう。
20) この「保田」は玉造署保田部長の事であることが，ここでは引用しなかった後の部分から明らかである。又，出発当時の幹事名から，保田為照氏の事であろう（「年輪」32 p. に当時の幹事全員の氏名が掲載されている）。
21) 「月刊誌『奄美大島』縮刷版」上巻，武山信夫編，1983年，131 p.
22) 昭和二年の誤りであろう。昭和元年の一月はそもそも存在しない。
23) 旧姓の誤りであろう。
24) 野島元輔：五十周年によせて。「年輪」，50 p.
25) 結成当時の――旅の小野津びと会々則（昭和2年会誌1号より）。「年輪」，40～41 p.
26) 旅の小野津びと会執行部：沿革！　旅の小野津びと会の歩み。「年輪」，43 p.
27) 現在の会則（改正昭和24年）。「年輪」，42 p.
28) 前掲注17)，32～33 p. なお，阪神以外の幹事は東京3，朝鮮1，アメリカ6である。
29) 氏は「東京小野津会」会長を4年，「関東喜界会」会長10年のほか「東京奄美会」の幹事長なども務められており，「小野津会には愛情がある。喜界島会だってそう」と言われるように，会の発展にはきわめて熱心な方である。筆者は，1989年4月，東京で，正岡五十一氏に紹介されて面会した。
30) 当時，喜界から鹿児島まで「日高丸」で24時間，鹿児島から東京まで特急で36時間かかったという。「僕（の親）も水呑百姓，兄弟が8人おり，小学校尋常科だけで『口べらし』のため」に東京に出たという。当時（昭和初期）は「東北地方などでは娘を売りとばした時代で，2.26事件，5.15事件など当時の革新的な青年が立ち上った時代であった」こともつけ加えられた。
31) 1人なので厳密にはグループとは言えないが，他とのつりあいから一応グループと呼んでおく。
32) （　）内は生年を示す。以下同様。
33) 「年輪」には岩尾池三ともある。84 p.
34) 氏は蛭沼印刷で働いており，これも山元正宜氏の世話であると言う。

35) 小泉卯之輔：回想記。「年輪」，254～257 p.
36) 西謙亮：東京小野津人会。「年輪」，84 p.
37) 西謙亮：東京便り。「年輪」，107～109 p.
38) 前掲注3)，190 p. 大正4年3月は，早町高等小学校の卒業年月であろう。なお「郷土史」270 p. では，氏は大正2学年度の小野津小学校の卒業生となっている。
39) 同上，193 p. なお（　）内は筆者挿入
40) 「売り値は設備一切共で三千円程度，私には大金でしたが，第一，家内が乗り気で，結局，貯金の足りない分は家内の父から借りることにして」はじめたと言う。鉛版工としての当時の彼の賃金は60～70円位で，7時から夜の10時位までが普通の勤務時間であるところを，仕事が忙しく，夜の12時，1時まで働いたので賃金もよく，他方，無駄費いもしなかったため，次第に貯金も出きてきていたという。
41) 「五十年の歩み―三晃印刷創立五十周年記念―」，三晃印刷株式会社，1978（昭和53）年，11 p. なお，注のない「　」の引用は「年輪」からである。
42) 同上。
43) 同上，12～13 p.
44) 同上，13 p.
45) このコンマはない方が良く，誤りかと思う。
46) 前掲注41)，29 p.
47) 山元速雄氏の話による。
48) 山元正宜：東京小野津会の歩み。「年輪」，189 p.
49) 機関紙，「東京小野津会」第9号（平成元年4月1日発行）に，第1回敬老会の写真及び山元速雄氏の解説がある。出席者は子供約30名を含めて95名であった。
50) 前掲注41)，205 p. 以下本節の引用はすべて同書205～215 p. による。
51) 1962年の最大採用県は宮城県の17名で，これはS専務の出身県である。
52) 関東の多さは，東京出郷者の子弟の採用という事も考えられるが，この点については確かめられなかった。
53) 鹿児島県出身者が小野津あるいは喜界島出身者であるかどうかはわからない。この点も今後の課題である。
54) 一般の英語辞典では，「分離」，「隔離」などの訳が普通であり，また，「生物の住分け」の訳のある辞書もみられる。「凝離」（ぎょうり）と訳している「社会学事典」もある。見田・栗原・田中編（1988）：社会学事典，弘文堂，215 p.
55) これらの市は，すぐあとで指摘するように，いずれも東武東上線沿線にある。
56) これらは，コンピューター修理，商事会社，プラスチック加工，溶接，自動車部品販売である。
57) 山本速雄氏からのききとりによる。
58) 東京生まれである彼等の2・3世の問題など，検討すべき問題は多々あるが，これらについては別稿に譲りたい。

謝　　辞

本稿作成に当り，小野津，喜界島，奄美出身者の多くの方々に，直接，間接の様々な援助を受けた。とくに，東京在住の山元速雄，正岡五十一両氏には，貴重な書物の贈・貸与をはじめ，数々の経験談，関係者の紹介，その他関連資料についての情報の提供など，多大な協力を得た。ここに，出身者の皆様，とりわけ山元，正岡両氏に対し，心から深く感謝する次第である。